

身体表現の園内研修

—保育者対象の実技講習より—

本山 益子、渡邊 友子

筆者らは、このこども園での「子どもと楽しむ表現あそび」の保育実践を目指して園内研修を継続している。その一環として2014年に身体表現の実技講習を取り入れた。その活動内容の分析と保育者の振り返り記述からこの実技講習を検証することにした。その結果、身体表現あそびの要素をいろいろな観点で取り入れ、さらに、「表現を楽しむ」内容に「創作・発表」「教材研究」「先生役」などの内容を含むことによって、保育者の保育実践変容につながることを期待できると推察できた。

キーワード：身体表現あそび、実技、保育者、園内研修、保育実践

1. はじめに

筆者は、このこども園において、2014年度より身体表現の園内研修を実施している。身体表現あそびが育てる子どもの力を保育者が共通理解し、日々の保育に積極的に取り入れていくことを保育者と共に目指している。しかし、日常的な保育に身体表現を取り入れることに対しては、当初、保育者側にはかなりの抵抗があったことも事実である。そして、研修を重ねる中、そのような現状に確実な変化があったとは断言できないが、園内研修の際に実施される保育には保育者の育ちや変容を確認することができ、保育学会においても報告してきた。(68回¹⁾・69回²⁾大会)。そのポスター発表の際、園内研修の一端として実施している、保育者を対象とした身体表現の実技講習(筆者が講師)に関する質問をいただいた。実際、「保育者自身が表現を体感することにより今までの苦手意識を回避するような感想を全員から得ることができた。これらを経て12月の保育実践を行ったところ、子どもと楽しむ保育者の姿が確認された」と68回大会において報告しているが、その内容や方法に

関しての検証には至っていない。

そこで、この実技講習に焦点を絞り、園内研修を検討することにした。そして、保育実践(身体表現あそび)につながる実技講習の内容と方法について検討するための、一基礎資料を得ることを目的とする。

2. 研究方法

- (1) 期間：①2014年11月 ②2015年8月
③2015年11月 ④2016年6月
- (2) 対象：京都府綾部市 綾東こども園保育士
講習参加者11名
①8名 ②6名 ③6名 ④6名
- (3) 講習の時間：17:30～19:00
午前中の保育において、各クラスが保育実践(身体表現あそび)を実施している。
- (4) 講習のテーマ：子どもと楽しむ表現あそび
①いろいろな観点からのアプローチ
②日常からのつながりを大切に
③子どもと表現の世界を楽しもう
④動きを引き出すために
- (5) 講習の分析：各回の講習の構成に関して、当

日配布のレジюмеに示した各活動別にその内容と身体表現の要素を、それぞれ次の観点で分析した。

①活動内容

A. ゲーム的要素を楽しむ B. 表現を楽しむ C. 先生役(言葉かけ・保育実践) D. 創作と発表 E. 教材研究 F. 保育実践を観る

②身体表現の要素

a. からだ b. 動き c. 音(歌) d. 身近なもの e. かかわり f. イメージ g. 絵本(お話)

尚、この7つの要素は筆者らが授業で使用するテキスト³⁾4章「演習ノート」の項目を参照にしている。

- (6) 振り返り：次の観点で講習を振り返り、自由記述での感想を求めた。

①自分で表現あそびをしてみてどうだったか？

②今後の保育にどのように役立てたいと思うか？

③その他の感想

3. 結果と考察

(1) 実技講習の実際

全4回の園内研修に関して、午前中に実施された保育実践(身体表現あそび)と夕方に実施した実技講習の実際を表1にまとめた。

この表より、実技講習の活動内容と身体表現の要素に関して実施順に検討したい。

①第1回目の講習

第1回に関しては、「1回限りの講習会」と認識していたため、とにかく、保育者に表現の楽しさを実感してもらうことを目指し、6種類の活動を実施した。

活動内容に関しては、講習の導入としてA. ゲーム的要素からスタートし、保育者の心身をほぐしている。そして、「歌を手がかりに」「か

らだを意識して」「お話をつくろう」などの活動からわかるように、多様な観点からのB. 表現を楽しむ内容が盛り込まれている。さらに、保育実践へのつながりを意図して、新聞紙の表現を実施している。2人組で、「新聞紙を動かし言葉をかける人(保育者)」と「新聞紙になって動く人(子ども)」になり、C. 先生役だけでなく、子どもの立場の体験も盛り込んでいる。そして最後に、実際の「劇あそび」なども想定した「絵本から」の活動では、g. 絵本の世界を身体表現でD. 創作と発表をすることを課している。その創作は2グループで実施し、お互いの発表を見せ合い評価した。

また、具体的な身体表現の要素に関しては、分析の観点のa～gの7項目の全てを含んでおり、今回のテーマに記した「いろいろな観点からのアプローチ」がなされていたことがわかる。さらに、ひとつの活動として、a. からだc. 音e. かかわりg. 絵本などの要素が強調されている活動も多く、身体表現の要素が意識できる内容になっていたことが確認できた。

第1回目の講習は、「最初で最後」の研修になる可能性があった。したがって、表現の多様性と楽しさを伝えるために、身体表現に関して、多様な活動内容と身体表現の要素を盛り込んだ構成になっていることが明らかになった。

②第2回目の講習

年度を改めてではあるが、第2回目を実施できることになった。今回テーマを「日常からのつながりを大切に」とし、日常の動きに焦点を当てることにした。ひとつの動きを多様化し実際に動くこと。動きを繰り返すなかでイメージと関連させることの体感を目指したので、身体表現の要素としても、b. 動きとf. イメージがメインになっている。c. 音e. かかわりg. お話は含まれていたが、d. 身近なものは用いてお

表 1. 実技講習の実践と保育者の実践

回	第1回	第2回	第3回	第4回
実施日	2014. 11. 13	2015. 8. 7	2015. 11. 20	2016. 6. 3
講習の活動内容	ウォーミング・アップ：A・e ・サバイバルジャンケン ・すずめのお宿	歌を手がかりに：B・c ・「あんだがたどこさ」	ジャンケンから：B・ace ・ジャンケン列車 ・からだでジャンケン ・「グー・チョキ・パーで」	動きから：E・b ・大きくなったり ・小さくなったり 多様化の提案 (どんなふうに・どこから・どこへ)
	歌を手がかりに：B・c ・「大きな太鼓」から	まねっこ遊び：C・ce ・「トントン〇〇」 ・「ブラブラパッ・グニャグニャボン」 ・「大きくトン小さくトット」	動きからの創作：D・bc ・「走るー止まる」から 「彫刻の森」創作⇒発表 ・「お花かわらった」から 替え歌創作⇒発表	言葉から：C・c ・擬音語・擬態語の変化と動き 言葉の発し方の多様化の提案 (ユラ・ネバ・フワ・コロ・クル・ピョン) ・擬音語・擬態語からお話へ：B・c ・宇宙語での会話⇒宇宙人の世界
	からだを意識して：B・a ・O (まる) ・ソフトクリーム ・風船	動きの多様化とイメージ：E・bf ・6つの動き (歩く・跳ぶ・転がる・走る・這う・回る) 動きの実験⇒表作成	表現の世界へ：E・fg ・「〇〇のたまご」 どんなたまご〜どうやって生まれる 〜うまれてから たまごの表現⇒ことばかけ：C・fg	絵本から：F・g 「ノンたん泳ぐのだいすき」 実際の保育視聴
	新聞紙：C・bd 動きの要素を変化させて動かしてみよう	お話づくりから：D・g ・花火の表現の創作⇒発表		
	お話をつくろう：B・fg ・タンポポの綿毛 ・納豆ネハネバ ・乗り物 ・海の生き物			
	絵本から：D・g「だいじなものがない」 お話の身体表現創作⇒発表			
	A	④おたまじゃくし (8/7) ⇒かに (8/19) ⇒芋掘りの芋 (11/20) ⇒落ち葉 (12/11)		③カエル (6/3)
	B	③ボール (11/13) ⇒変身ごっこ：ソウ・ウサギ・カエル・トンポ・チョウチョ (12/12) ⑤シャボン玉 (8/7) ⇒花火 (8/19) ⇒身体をくっつける (11/20) ⇒粘土 (12/11) ⑤きのこの森へ行こう (6/3) ⇒身体ジャンケン (11/25)		
	C	⑤忍者 (11/13) ⇒忍者 (12/12) ②変身ごっこ：飛行機・ウサギ・カエル・ (11/20) ⇒むすんでひらいてから (12/11) ④春〜とんだらう (6/3) ⇒秋のお散歩 (11/25)		③カエル (6/3) ⇒粘土 (11/25)
	D			
	E	②おにぎり (11/13) ⇒ころころ卵 (12/12)		
保育者による実践	F	④新聞紙 (11/13) ⇒風船 (12/12)		
	G	③動物：うさぎ・ソウ (8/7) ⇒魚 (8/19) ⇒③乗り物：バス・飛行機 (11/20) ⇒たまごになって (12/11)		②おいもになろう (11/25)
	H			

注：表中の記号について

講習の活動内容	活動内容	A：ゲーム的要素を楽しむ	B：表現を楽しむ	C：先生役 (言葉かけ・保育実践)	D：創作と発表	E：教材研究	F：保育実践を観る
講習の活動内容	身体表現の要素	a：からだ	b：動き	c：音 (歌・擬音語・擬態語)	d：身近なもの	e：かわわり	f：イメージ g：絵本 (お話)
保育者による実践	②～⑥は、実践を行ったクラスの年齢を、A～Hは実践した保育士を示している						

らず、当然からだは用いるが、身体表現の要素として強調された活動はなかった。活動としては4種類の活動が実施された。

その活動内容に関しては、今回も、歌「あんたがたどこさ」を用いて、B. 表現を楽しむことから始めている。さらに今回、動きを構成する3要素（時間・空間・力）について説明し、プリントへの記入を実施した。つまり、「歩く・跳ぶ・転がる・走る・這う・回る」という6種類の動きについて、①動きの3要素を変化させることによる動きの多様化の実施とプリントへの記載。②動きの体感から描かれるイメージの記載を求めた。つまり、これが今回の活動内容の特徴であるE. 教材研究の実施にあたる。その他では、今回の導入として、「歌を手がかりに」した遊びからB. 表現を楽しむことを促し、「まねっこ遊び」につなげた。2人組で実施する「まねっこ遊び」では、前回同様、保育者と子どもの両方の立場にたちC. 先生役を体験してもらっている。最後には、「跳ぶ」動きからイメージされた花火をテーマとし、グループでの身体表現のD. 創作と発表を行い見せ合った。

第2回目においては、身体表現のb. 動きとf. イメージに焦点を絞り、E. 教材研究を通して深め、それを自分たちでのD. 創作と発表につなげている。身体表現の動きとイメージの関連性に関する知識の獲得と、保育者として必要な表現力の育成を目指す構成になっていたことが読み取れる。

③第3回目の講習

第3回目は2015年における2回目の研修となり、前回の研修から3ヶ月しか経っていない。今回は「子どもと表現の世界を楽しもう」をテーマとし、保育実践につなげることを目指し3種類の活動を実施した。

まず、身体表現の要素としては、分析の観点

のd. 身近なものをのぞく6項目を含んでいる。第1回目や第2回目との違いは、ひとつの活動のいずれにおいても、複数の要素が含まれていることである。つまり、「ジャンケンから」はa. からだc. 歌e. かかわりの3種類、「動きからの創作」という活動も、b. 動きとc. 歌が含まれるなど、複数の要素が混在した活動へと複合化していることがわかる。

活動内容としては、今回もB. 表現を楽しむことからスタートしているが、その後すぐに、D. 創作と発表を求めている。つまり、「走る－止まる」を繰り返し「彫刻の森」を創作することや「お花がわらった」の替え歌から動きの創作を求め、発表を実施している。前2回は講習の最後に課していたD. 創作と発表を、今回は2つめの活動で課しているのである。ここに保育者の表現力の成長を感じ取ることができる。

そして、今回も「○○のたまご」の活動においてE. 教材研究を実施した。5種類のたまごに関して「どんなたまご？～どうやってうまれる？～うまれてから？」という観点でイメージを描き、プリントに記載することを求めた。実際にたまごの表現を体験した後、2人組の1人が「先生役」、もう1人が「たまご」になり、C. 先生役に「ことばかけ」を試みてもらった。「ことばかけ」に関しては、①「どんな？ どうやって？」と問いかけることばと、②その言葉に呼応して表現される子ども役の様子や動きをことばにすることを求めた。つまり、実際の保育実践への活用を意図している。

第3回目においては、研修の途中に課されたD. 創作と発表を消化するだけでなく、テーマである「子どもと表現の世界を楽しもう」むための具体的な活動として、E. 教材研究を実施し、それに基づくC. 先生役が組み込まれていた。すなわち、今回の「先生役」は、保育者が実施したE.

教材研究からつながっていることが特徴としてあげられる。ここに、第1回目の「新聞紙」や第2回目の「まねっこ遊び」で経験した「先生役」とは異なる深まりが認められ、より「保育実践」につながる構成であることが読み取れる。

④第4回目の講習

毎回の講習は、園内研修の一環として実施されている保育者の「保育実践」の変容を感じながら組み立ててきた。そんな中、課題として感じられた子どもから「動きを引き出すために」を、今回のテーマとした。第2回目に動きの3要素をベースに「動き」の多様化を実施したが、その時の「動き」は移動をとまっていた。今回は、その場での「動き」の変化「大きくなったりー小さくなったり」を取りあげ、特に、位置や方向性など空間利用の気づきを促したいと考えた。さらに、「どんなふうに」という表現的要素に関しては、「擬音語・擬態語」が有効な言葉であるので、その声かけも経験してもらうことにした。

つまり、今回のテーマ設定は保育者による「保育実践」の変容に基づいてなされたため、身体表現の要素はb. 動きとc. 音（擬音語・擬態語）の2種類のみで構成されていることがわかる。

具体的には、車座に座った保育者が順番に、各自が思い描いた「大きくなったりー小さくなったり」をからだで提示し、みなが真似するというスタイルをとった。思いつく限界までの「大きくなったりー小さくなったり」を全員で探し、その後、立ち上がって同じことを試みた。つまり、活動内容としては、プリントへの記載ではないE. 教材研究にあたりと考える。

次に、「ユラ・ネバ・フワ・コロ・クル・ピョン」という質感の異なる擬音語・擬態語を取りあげ、多様な言い方で声による表現を試みた。さらに、1人がC. 先生役になって「ユーラ・ユ

ラ・ユラユラ・ユラッ・ユラー・・・」など、言葉を多様に変化させて発声し、その他全員は、その声を聞いて動き、からだでの表現を楽しんだ。最後に、「宇宙語（擬音語・擬態語）」しか話さない宇宙人になって、いろいろな「宇宙語」での会話を試み、B. 表現を楽しむことで締めくくった。

そして今回、3種類の活動を実施したが、その最後は、実技ではなく他の保育者が実施している身体表現あそびの保育実践（DVD）の視聴を取り入れた。F. 保育実践を観ることを取り入れ、意見交換を促し、次回の保育実践につなげようとの試みが確認できた。

⑤4回の講習の流れ

最初から4回の予定ではなく、第1回目での終了も想定された講習であった。継続されるようになると、毎回、保育者による保育実践の内容も考慮し、講習を組み立てた。ただ、講習の全体を通したテーマが「子どもと楽しむ表現あそび」であるように、講習の根底には、子どもと表現あそびを楽しんで欲しいとの願いが息づいている。

その4回の講習の流れを活動内容と身体表現の要素からまとめた。

まず、身体表現の要素としては、第1回目はa～gの7項目の全てを含んだ構成になっていた。また、第1回目や第2回目においては、ひとつの活動にe. かかわりやa. からだなどのひとつの要素しか含まれていない活動もあったが、第3回目には、すべての活動が、複数の要素から構成されており、構成が複合化していた。一方、第4回目では、b. 動きとc. 音（擬音語・擬態語）のみの要素で構成されているが、必要と考えられたこの2つの要素に特化した講習になっていることが読み取れた。

すなわち、講習全体の最初に、身体表現あそ

びの全般的な要素を網羅し、それをベースに、保育者に必要な身体表現の要素に特化し、あるいは複合化した活動を実施するという流れを確認することができた。この流れは、身体表現の要素について、ひとつひとつの要素の確認から始め、その要素の組み合わせをも確認し、さらに、ひとつの要素の深化も体験し、身体表現あそびの多様性を実感させることにつながったと考える。

次に活動内容に関しては、A. ゲーム的要素を楽しむやB. 表現を楽しむことを重視した第1回目は、6つの活動中4つが、その楽しむ要素で構成されている。しかし、このように保育者が表現を楽しむことを原点としながらも、次の段階のD. 創作と発表やC. 先生役も組み込んでいることがわかる。さらに、第2回目と第3回目はB. 表現を楽しむは導入として1つの活動が実施されているだけである。それ以外では、第1回目の継続としてE. 教材研究が取り入れられ、表現の深まりが意図されている。さらに、そのE. 教材研究から、第2回目ではD. 創作・発表へと活動が展開され、第3回目ではC. 先生役へとつながられている。第4回目においても、E. 教材研究からC. 先生役への流れは継続されており、ここに、「保育実践」をより意識した流れを確認することができた。つまり、今回の4回の講習には、保育者自身が楽しむ活動内容から、保育実践を目指す活動へという流れを読み取ることができたと考える。

(2) 保育者の振り返り

各実技講習の体験後に、①「自分で表現あそびをしてみてどうだったか」②「今後の保育にどのように役立てたいと思うか」③「その他の感想」の観点で、保育者に振り返りを求めた。毎回、参加者が少なく、固定されたメンバーでは

ないので、質的に検討したいと考える。

①第1回目の記述より

第1回目の講習においては、筆者が意図した表現の多様性と楽しさを、受講した保育者8名の記述から検討したい。

まず、8名中6名が、3つの質問のいずれかにおいて「楽しかった」と記述している。

具体的に見てみると、「まずは楽しかった (G 保育者)」「同僚の先生達と楽しめた (F)」「開放的になれて楽しかった (B)」「人と関わる楽しさを味わいながら、心の開放感を感じた (I)」「身体を動かして楽しかった (A)」「いろんな動きが楽しめるようになり、イメージがふくらみ楽しかった (E)」「身体を意識して動きを工夫することを楽しめた (I)」「表現することって楽しいなと実感した (B)」「他のグループを見るのも楽しめた (E)」との記述があげられる。つまり、「身体を動かす」「動きを工夫する」「人と関わる」「イメージがふくらみ」「表現する」「観る」など、身体表現の要素に関連する多様な楽しさを実感していたことがわかる。

さらに、表現に関する記述は5名で見られた。具体的に見てみると「もっともっと表現あそびは自由なものであることが今日わかった (E)」や「『表現は難しい』『表現はこうでなければならない』と勝手に思い込んでいた (B)」「簡単なあそびの中にそれぞれの表現が有り、一番身近なものかなとも感じた (A)」「何をしても正解と捉えると気分が楽になり、のびのびと表現できる (F)」「自分から自然にわき出る表現 (驚き・喜び) など大事な表現 (E)」などがあげられる。これらは、講習前は、身体表現を「難しい」と捉えていたが、今回、「自由なもの」「身近なもの」として捉えている。「こうでなければならない」との思いから「何をしても正解」との捉え方への変容が示唆されている。「自然にわき出る

表現」の重要性にも気づいていることがわかる。さらに、「指導者の言葉かけひとつで、動きや表現が変わる (B)」や「保育者が楽しくなければ、子どもも楽しくないことを、体で実感した (G)」「何気なくしている言葉かけも本当に大切なんだ (I)」などは、身体表現遊びの体験を通した保育全般への大切な気づきである。今回、筆者の言葉かけを聞き、自分が動くこと・自分が表現する機会を得たことが、このような気づきをもたらしたものとする。

② B 保育者の記述より

全ての講習に参加し全ての保育実践を行ったのは B 保育者 1 人である。この B 保育者は、毎回、記述②欄「今後の保育にどのように役立てたいか」において、毎回「子ども」について触れている。具体的に B 保育者の記述を見てみる。

第 1 回「表現あそびを通して、子どもたちにも、体を動かす楽しさ、表現する楽しさを伝えられたらいいと思う」

第 2 回「子どもたちと一緒にやって、表現あそびを楽しみたいと思った。子どもたちだけが楽しむのではなく、保育者も一緒にからだを動かして、子どもの気づきや発見に共感できたらいいと思った」

第 3 回「子どもが発信することによって、気づいて、認めていくことで、自信につながってほしい」

第 4 回「声の表現の方法によって、同じ言葉でも色々な表現が広がっていくことがわかった。子どもたちからどんな表現がでてくるのかな？と子どもたちとやってみたくなった」である。

つまり、子どもとの表現あそびに対して「楽しさを伝えたい」⇒「一緒に表現遊びを楽しみたい」⇒「子どもたちとやってみたくなった」と、その姿勢が前向きに変容していることがわか

る。

さらに、子どもとの関わりや育ちに関して、「気づきや発見に共感できたらいいな」⇒「気づいて、認めていくことで、自信につながってほしい」と記述し、表現遊びのなかでの、共感・承認の大切さをも実感し、自らの保育につなげようとしていることがわかる。

また、表 1 より、この B 保育者の保育実践を見てみる。講習前は「ボール」をテーマとしており、これは先輩保育者の実践を真似た内容であった。つまり、保育を組み立てる際に、子どもの興味・関心を優先して考慮していたとは考えられない。それが、徐々に、「シャボン玉」や「きのこの森へ行こう」など、子どもの日常生活に基づいた内容を実践するようになった。さらに、「身体をくっつける」や「身体ジャンケン」などのように、講習を参考にした保育実践も取り入れられていることがわかる。

つまり、B 保育者は、講習を重ねるなかで、子どもと一緒に表現を楽しみたいという思いが芽生え、その実現のために、講習内容も参考に、子ども主役の保育実践を試みていることが読み取れる。以上、1 人の保育者に限定されてはいるが、園内研修における身体表現遊びの実践において、今回の講習を通した保育実践の変容も推察することができた。

今回対象とした保育者の大半が、実技講習を通して、少なくとも身体表現あそびの楽しさを実感し、「表現」に対する自らの捉え方や姿勢を省みていることも明らかになったと考える。つまり、B 保育者に見られたように「子どもと楽しむ表現あそび」の保育実践のスタートは切れたものとする。

4. まとめ

身体表現あそびの園内研修の一環として実施

した「子どもと楽しむ表現遊び」の実技講習の検証を試みた。当初は1回での終了も想定された実技講習だったが、3年に亘り4回の講習を実施することができた。

その実際の活動内容は、身体表現あそびの7つの要素(a.からだ b.動き c.音 d.身近なもの e.かわり f.イメージ g.絵本)の全てをそれぞれ確認する活動からスタートし、回を重ねる中で、要素を深化させ、あるいは複合化した活動へと、講習が構成されていた。さらに、保育者自身が「表現を楽しむ」ことをベースに構成されていた講習内容に、保育者の表現力の向上のために「創作・発表」が加えられた。実際、その「創作・発表」も講習途中で課されるなど、保育者の表現力の向上を確認することもできた。さらに、身体表現あそびの知識の獲得のための「教材研究」や、言葉かけなどの実践力につながる「先生役」などが、保育実践を想定した内容として加えられていた。

そして、講習後の「振り返り」記述からは、まず、第1回目において、大半の保育者が、身体表現あそびの要素に関連した多様な楽しさの実感を記述していた。さらに、従前に抱いていた、型にはまった表現の狭い捉え方を見直し、「自由」「身近」「自然にわき出る」など、表現の柔軟な捉え方への変容が読み取れた。また、実際に子ども役で動いたことで誘発された表現や保育への気づきも複数確認することができ、B保育者においては、保育実践の変容も推察することができた。

今回、園内研修に実技講習を取り入れたことについて、一定の効果があつたと捉えている。つまり、実技講習は自分の身体を通しての理解に

つながり、まさに、記述に示されたいろいろな実感・体感をもたらしている。特に、子どもの立場に立つ経験は、実績を積んだ保育者に貴重な機会を提供したと考える。初心に立ち返るだけではなく、学生時代には感じ得なかった気づきをもたらし、あるいは、自分の保育を省察する機会として機能したことが推察できる。これも、今回の講習が第1回「表現を楽しむ」のみで終了せずに継続できたこと。さらには、その講習が、今回対象とした保育者に必要な活動内容によって構成され、保育実践での反映が可能であつたことも功を奏したかもしれない。

ただ、保育実践に至っては、保育者に進んで「やりたい」気持ちを持たせることには至っておらず、まだまだハードルは高いと言える。しかし、その保育実践にも、講習での経験を自分なりに取り入れる保育者の姿は確認できている。今後も「子どもと楽しむ表現あそび」の実践を目指して、研究を継続したいと考える。

なお、本稿は日本保育学会第70回大会（川崎医療福祉大学 2017）でのポスター発表⁴⁾をまとめたものである。

参考文献

- 1) 渡邊友子 上田洋美 塩尻麻子 本山益子 身体表現の園内研修—保育者の学びと育ち— 日本保育学会第68回大会 2015
- 2) 渡邊友子 上田洋美 塩尻麻子 本山益子 身体表現の園内研修Ⅱ—保育実践の変容— 日本保育学会第69回大会 2016
- 3) 西 洋子 本山益子 吉川京子 子ども・からだ・表現—豊かな保育内容の理論と演習— [改訂2版] 市村出版 2009
- 4) 本山益子 渡邊友子 青山正江 塩尻麻子 身体表現の園内研修Ⅳ—保育士対象の実技研修会より— 日本保育学会第70回大会 2017